

CO-BO「発達障害のある子どもの学び」に関わる社会問題の構造（仮説）

何が起きているのか

- 通常学級にいる発達障害の子どもたちは、自他ともに障害の認識がなく、学習や学校生活でさまざまな困難を抱えているケースも多い
- 周囲の理解不足から子どもだけでなく親の自尊心も傷つけられ二次障害を起こすケースも多い
- 学校を卒業したあとのことを考えた教育がなされておらず、卒業後に就業や社会生活で困難を抱えるケースもある

なぜそれが起きているのか

直接的な原因

- 発達障害の特性が知られていない**
 - ・努力しても改善が難しい等、発達障害への理解が乏しい
- 親は発達障害だと認めたくない**
 - ・「まさかうちの子が…」と現実と向き合わない
- そもそも発達障害の診断そのものが難しい**
 - ・同じ障害がある人同士でも個人差がとても大きく分かりづらい
 - ・家庭生活と学校生活の状況で判断する必要があるが、それらを医師が問診で判断するのは難しい
- 発達障害をふまえた教育がなされていない**
 - ・教員個人や学校の判断に委ねられている
 - ・苦手部分ばかり注目される
 - ・努力しても改善が難しい障害に対し、努力による克服を強いられる
- 知見の共有やツールの活用がなされていない**
 - ・特別支援学級/学校での知見やサポートツールが通常学級に共有されていない

原因を生む背景

- 学校**
 - 選択肢が極端で不可逆**
 - ・小学1年になる際の診断により通常学級か特別支援学校/学級かが決定し、そのあとに変更することが難しい
 - ・特別支援学校/学級に進むと中学卒業後の選択肢が限られている
 - 公立学校でも対応はさまざま**
 - ・インクルーシブ教育や合理的配慮といった対応が学校長によって差が出やすく、学校長が変わると対応も変わる
 - ・多忙で、目の前の子どもを無事卒業させることで手一杯の教師もいる
- 家庭**
 - 親にかかる過度な負担**
 - ・生まれつきのもので育て方で変えられるものではない
 - ・本人や周囲が気づきにくく、気付いたとしても相談先がわからず支援要請の声をあげられない。親が孤立することで子どもの孤立を招く
 - 親が発達障害であるケースもある**
 - ・家族内集積性により、親子ともに発達障害の場合がある
 - ・親自身も発達障害で、親子で異なる特性だと互いに理解できない
- 社会**
 - 発達障害に関する社会的な認知が低い**
 - ・「できるところ」よりも「できないところ」を注目されがち
 - ・同調圧力が強く、他の子どもと同じことを期待する

なぜそれが問題なのか

適切な教育を受ける権利を侵害されている

すべての人が適切な教育を受ける権利を保障されているが、発達障害のある子どもの学びの環境は整っていない

本人の責によらないところで結果責任を問われる

先天的な特性で、本人の努力では状況改善が難しいのに、社会からは努力不足とみなされサポートもされない

経済的自立だけでなく、こころの自立も難しくなる

本人の能力を発揮しづらいため、卒業後の社会参加や自己肯定感が限定的になってしまう

他の社会問題との関係・つながり

・うつ病、ニート・ひきこもり、不安定就労、いじめ、児童虐待 等

現時点での取り組み

- 行政**
 - ・地域支援コーディネーターの設置など発達障害者支援体制の整備
 - ・法整備により広く国民全体に理解されることをめざす
 - ・厚生労働省が2016年春から地域で開業する小児科医らを広く対象にした研修を始める
- 学校**
 - ・アセスメントツール等による個々人の特性理解
 - ・ユニバーサルデザイン、マルチバーサルデザインといった、さまざまな特性を持った子どもの学習環境づくり
- 社会**
 - ・支援団体や市民ボランティアによる無料の学習支援や課外活動の実施、フードバンク等の企業を巻き込んだ支援のしくみの確立

今見えてきていること

- ・発達障害に対する社会的認知が進み、通常学級の中でも「困っている子」の問題に目がいくようになってきている
- ・地域特別支援教育コーディネーター等により特別支援学校/学級のツールが通常学級にも共有されることで、個々人の能力を活かす教育ができる環境が整ってきている
- ・学校の現体制では、人員やノウハウから、量的質的に対応するのは難しい



考えてみよう

- 仮説で描かれた「社会問題の構造」について、あなたが気になった部分はどこですか？それはなぜですか？
- 気になったことに対して、あなた自身ができそうなことはありますか？